

2011. 3. 11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた 《 いいつたえ、むかしばなし、はなし 》

その3

宮城県教育委員会の委託を受けて「宮城県民話伝承調査」をおこなったのは、1985年から1988年の3カ年でした。いまから、30年近く前のこととなります。

その時に、聞き書きした宮城県各地の民話は2513話、民話を語ってくださった方は388人に及びました。

これらの記録は、『宮城県文化財調査報告書第130集—宮城県の民話 民話伝承調査報告書』（1988年3月刊）としてまとめ、宮城県教育委員会から出版されましたが、当時の区割りによる74市町村から、3話ないし5話を選んで活字化するという形でした。したがって、聞き集めた民話の約1割に当たる274話のみの収録となりました。残りの2200話あまりの民話の記録と、語ってくださった話者の声は、わたしたちの手許に置かれたままでした。

これらの貴重な記録と語られた声は、わたしたちが採訪して聞き集めた他の民話とともに、目下、「民話 声の図書室」の大切な材料として、みなさんと共有すべく作業をすすめています。

いま、ここに紹介する民話は、かつて「民話伝承調査」をおこなった時に聞いたものであり、2011年3月11日、津波に襲われて、被災した集落で語られていた民話です。語った方のほとんどは、震災の前にすでに亡くなっています。そして、語られた土地の姿はいま、変わり果てました。若い人の多くは、浜を去ることを余儀なくされました。

しかし、手許に残った語りは、ここで生きていた人々の姿を、ありありとわたしたちに伝えてくれます。それは、この土地特有の話もあれば、そうでないものもあります。日本民俗学が分類した口承文芸の分野に属する典型的な話型が、「実話」として語られていることも見逃せない大事な点です。人々の暮らしがいつも「物語」とともにあったことを教えてくれます。

それらすべてを含めて、「この土地で語られていた民話」という括りでまとめてみました。

よその土地からもたらされた話や、隣町での出来事を語るものや、遠くの島のいわれを教える話や、全国的に話型がみられるものがこの土地らしい姿で根付いた話など、さまざまな方法でムラに蒔かれた話の種が、語り継がれていたことを忘れてたくありません。

「2011. 3. 11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《 いいつたえ、むかしばなし、はなし 》」というテーマのもとに、シリーズで、みなさんに届けていく計画です。

一回目は、本吉郡南三陸町戸倉で聞いた語りのなかから、8話を紹介しました。二回目は石巻市雄勝町周辺で聞いた7話を紹介しました。

今回は三回目になりますが、気仙沼市本吉町周辺で聞いた民話を紹介いたします。

気仙沼市本吉町周辺の民話

- 第一話 ワラビの恩
- 第二話 カッコン坊さん
 (1) 峰に一里の^{たい}平らあり
 (2) ところどころに窓つける
- 第三話 長良の生き埋め^{うず}(横継ぎのいましめ)
- 第四話 紐がへびになる
- 第五話 智恵、智恵、智恵
 (1) 犬の脚
 (2) 四十^{しじゅう}から老い^おに入る
 (3) 闇夜のカラス
 (4) ミミズクの耳か、タカ^{たか}の目か
- 第六話 嫁ごたち
 (1) なんでも〈お〉をつけろよ
 (2) 屁^ぺったれ嫁ご
 (3) 屁^ぺたれて死んだ嫁さん
- 第七話 お^ほら方の桃太郎
- 第八話 白馬で竜宮城へ行った和尚さんと小僧さん

(記録 小野和子)

本吉町小泉、津谷で聞いた民話から

第一話 ワラビの恩

むかし。クチハビ(マムシ)が木に登って、昼寝していたんだと。

いいあんばいな春の日だったから、気持ちよく寝ていたんだね。木の下には竹が育っていて、ほそい^{おが}芽が、つくつくと頭を出していた。

クチハビの野郎、いい気持ちで寝ているうちに、ころんと木の上から下さ落ちてしまった。したら、下で芽え出していた竹に、ぐさっと突き刺さったんだと。

どんなにもがいても、なにしても抜けらんねえ。突き刺さったまんま、だんだん弱っていったんだと。

ところが、下にワラビが生えていたんだね、やっぱり頭をもたげて、ぐんぐん伸びていたのしゃ。そして、ぐんぐん伸びるにしたがって、竹に刺されてもがいているクチハビのどこまで来たわけだ。

苦しがつているクチハビの身体を、ワラビの頭が、つくっ、つくつと押し上げたのしゃ。

さあ、クチハビは喜んだ。ここで死ぬかと思っていたのに、伸びるワラビの頭で突き上げられて、とうとう刺さっていた竹から抜けて、ころんと下さ落ちたんだと。

まあ、よかった、よかった。

春のさなかのワラビつうのは、一日に、われの身の丈の倍も伸びるんだからね。それで、クチハビは助かったのしゃ。

それからというもの、山さワラビ採りに入るときは、かならず、こう唱えるようになったんだよ。それを唱えると、クチハビに咬まれることがないんだと、おれ、年寄りの人たちに聞いた。あんたも、やってみるといいよ。

三回、唱えるんだよ。

クチハビ クチハビ

がんぎ^{かぎ}(鉤)ワラビの恩を 忘るな

クチハビ クチハビ

がんぎワラビの恩を 忘るな

クチハビ クチハビ

がんぎワラビの恩を 忘るな

第二話 カッコン坊さん

このあたりを歩くお坊さんがいてね、おれたちは、「カッコン坊さん」と呼んでいたのしゃ。

坊さんは目が不自由でね、杖ついて、カッコン、カッコンと音立てて歩くから、そう呼んでいた。頭のいい、やさしい坊さんで、阿國浄瑠璃おくに じょうりなんぞ聞かせる人だったのしゃ。坊さんが、カッコン、カッコンとやって来ると、おれたちは、すぐに走っていったもんだ。

いろんな話を聞くのが楽しみで、楽しみでしゃ。

(1) 峰に一里の平らたいあり

あるとき、その坊さんがね、おれたちに、こんなことを言うのしゃ。

「あるところに、登りは七里、下りは七里の、合わせて十五里の峠あり」

こっちは子どもだけんど、

「坊さん。坊さん。七里と七里なら、十四里だべさ」

って言うと、坊さんはにやりと笑って、

「峰に一里の平らあり。七里登って七里下るなんてことはできねえべ。三角定規みたいな峠はねえんだよ。かならず、峰には平らがなくてはならぬ。んだから、登りは七里、下りは七里、合わせて十四里の峠になるのしゃ。そして、峰に一里の平らがあって、十五里になるわけだ」

まいった。まいった。

(2) ところどころに窓つける

また、あるときは、

「一尺八寸(約五十五センチメートル)の大竹を、するりと抜ける」

なんて言うから、

「一尺八寸なんて、おれの背より低いべっちゃ。誰だって、するりと抜けるよ」

そう言うと、

「いや、長さでねえ。巾だ、巾だ。長さは、空突くほどに果てしなく長なげえのしゃ」

「そんなに長え竹があんのかやあ。中は真っ暗で、なにも見えねえべや」

そうすると、坊さん、すまして言うのしゃ。

「ところどころに窓つける」

だってしゃ。

一尺八寸も、太さのある竹で、その長さは空突くほどに長くて、ところどころに窓がついてるなんてや、あるはずねえべ。

「そんなの、坊さんのホラだべっちゃ。ホラだ、ホラだ」

「ホラでねえぞ、これこそは、ほんとのほんとのホラだ」

なんてや、おれたち子どもを煙にまいて、おもしろがって笑っていた。

それから、カッコン、カッコンと行ってしまった。

第三話 長良の生き埋め(横継ぎのいましめ)

むかし、あるところにね、まず、よく水増しが起きてね、架けた橋が流されてしまうんだと。

それで、橋のたもとに人柱を立てると、土手が切れねえし、橋も流されねえ、ということになって、村で詮議がはじまったと。

「だれ、埋けたらええべ」

「だれも人柱さ立つ人はなかべ」

って語ってるうちに、一人の親父つあんが言ったんだと。

「そんだったら、横継ぎやっている人を埋めたら、よかんべ」

って。そしたらね、みんな賛成して、そうすることになったんだとしゃ。

いまだらね、洋服だから、横も縦もごぞえんべ、だども、むかしの百姓は、みんな縞の着物だから、縦の縞さ、横の縞の当て布なんど継いだら、まず、ばかにされたものしゃ。

ところが、そう言った人の着物に、横継ぎしてあったのが見つかったんだね。

それで、その親父つあんが生き埋めにされてしまったんだと。人柱にされたんだと。

「お父つあんは、自分の口のために生き埋めになったんだから、口、つつしめよ。つつしめよ」

って、そこの家の娘はいつも、お母つあんに言われていたんだと。

そして、そこの娘、年頃になって、嫁にいったんだと。

なんでもできて、いい嫁だったけれども、ほれ、さっぱり口を利かねんだ。ほんで、嫁入り先では、その嫁、実家さ帰すことにしたんだと。

「惜しい嫁だども、口利かねえんではな」

って、馬に乗せて、髷さんが家まで送っていったんだと。

ずっと山道を下ってきたれば、キジが、ケーンケーンって鳴いたんだと。そしたらね、そこにいた鉄砲撃ちが、ドーンと弾撃ったから、キジはばたばたと落ちてきたんだとしゃ。

それ見た嫁はね、はじめて口を利いたと。

わが親は 口ゆえ長良の人柱

キジも鳴かずば撃たれまい

こんな歌を詠んだんだと。それを聞いた髷どのは、

「これは口が利けないわけでねえ。立派な歌詠みもできる嫁だった」

って、また連れて帰って、夫婦仲良く、いつまでもしあわせに暮らしたってことですが。

こんで えんつこ まんまん

それから、もうひとつ「横継ぎ」のことだけど、いつか大きな水増しがあつてね、大勢の人が流されて、生き埋めになったんだと。ところが、息子を失ったおふくろさんがいて、

「おら家の息子は、絶対死なねえ。あの子に横継ぎの着物を着せたことねえからな」

って、くりかえし言っていたんだと。そしたら、二十日ばかりして、その息子、ほんとうに生きて見つかったの。

タツタツと落ちてくる水を飲んで、生きていたんだよ。横継ぎしなかったから生きていたのかどうか、

それはわからねえよ。だども、そういうこと信ずる人もいたんだね。

第四話 紐がへびになる

ほれ、意地の悪い嫁さんがいたんだと。

姑は、若いうちは嫁をいびっていたから、こんど寝ついてしまうと、嫁の天下なのしゃ。

「あれ食いたい。これ食いたい」

って、ばあさんが言っても、嫁は、さっぱり食わせないんだと。

そうしてるうちに、ほれ、ばあさん、死ぬようになったんだと。そして、死にそうな声して、息子さ言ったんだと。

「おれ、うどん食いてえやあ」

息子は、やっぱり、自分の母親だから、

「うどん買ってきて、食わせたら良かんべ」

って言ったら、嫁さんは、うどんどころか、掃き溜めさ行って、ミミズ掘ってきたんだと。

ミミズってやつは、煮ると白くなってうどんにそっくりになるんだよ。それを、ばあさんの枕元さ持って
いって、

「おばあさん、うどん、煮たから食べらいいん」

って、食わせたら、ばあさんは、なにも知らねえで、

「うんめえ。うんめえ」

って、いっぱい食ったんだと。

そうして、食ったらねえ、目えおろしたんだと。

嫁は、息子が来ねえうちに、

「おばあさん、銭っこでも貯めていたべな」

って、ばあさんの敷き布団をしっ立ててみたれば、むらさきの紐があったんだと。

「なんだ。紐か」

と思ったっけ、そいつあ、するすると立ち上がって、嫁さんの首たさ巻きついてきたんだと、へびになって
やあ。

ところが、みんなの眼にや、むらさき色の紐なんだと。嫁さんだけには、それがへびに見えて、見るた
んびに鎌首もたげてかかってくるんだと。

とつても、おっかなくてわかんねえから、嫁さんは、とうとうお寺の和尚さんさ相談に行ったんだと。
そしたら、和尚さんにね、

「そいつあ、おまえの精神が悪いために、そういうふうになるんだから、まず、神さま、仏さまを拜んで歩け」

って、そう言われてね、嫁さんな人は、ほれ、あっちこっちの神さま、仏さまを拜んで歩いたんだってよ。

それから、嫁さんがどうなったか、それは聞いてないけど。

「これは、ほんとのことでがんす」って、松岩の大工さんの奥さんに聞かせらった話だから、ほんとの話な
んだよ。死んだばあさんの思いしゃね。ばあさんは、ミミズ食わせらって死んだんだからしゃ。

第五話 智恵、智恵、智恵

(1) 犬の脚

むかし、犬は三本しか脚がなかったつうもな。

そこで、^{こうぼうだいし}弘法大師さまが、かわいそうだからって、もう一本つけて、四本にしてくださったんだと。犬は、その恩を忘れないで、^{しょうべん}小便するときは、いつも脚一本上げてするんだよ。

そこで、ほれ、おれの家では、借金取りが来ると、いつも、
「犬の^{しょうべん}小便でがす」

って言うのしゃ。

「脚^{あす}(明日)あげます」

って意味しゃね。はっ はっ はっ はっ はっ。

えんつこ まんまん さあけたあ

(2) ^{しじゅう お}四十から老いに入る

むかしね、ほれ。^{ほいど}乞食のような姿で、^{ろくぶ}諸国をまわって歩く^{おい}六部って人たちがいたんだね。背中に^{おい}笈を背負って、そして、^{ある}村々を歩いて、おもらいしていたのね。

そういう人たちが泊る宿屋があったんだと。

いろんな六部さんがいてね、宿に集まると、みんなで、「おれは、どこどこから来た」「おれは〇〇大師について修行した」「おれは六部になってから三十年だ」とかなんとか、みんなで話すんだと。そして、自慢するんだと。

それからこんどは、一人ひとりが歌を詠んで、競い合うんだと。

ところが、ここに若狭の方から来た六部で、歌詠みもなにもできねえ人がいたんだと。

だんだんに順番がまわってきて、はて、なんと歌を詠んだらいいかと思案していたっけ、そこさバタバタと一羽のシジュウカラが飛んできたんだと。

そして、^{おい}笈のなかに入ってしまったんだと。

「シジュウカラ ^{おい}笈に入る …」

って言ったんだと。そこまで言ったら、故郷の若狭のことが、きょうに思い出されて、

「若狭へ帰る道を知らず …」

と言ったれば、みんなたまげて、手を叩いたと。そして、一等賞になったんだと。

「四十から(シジュウカラ)老いに入る(笈に入る)若さ(若狭)に帰る道を知らず」

四十から 老いに入る

若さにかえる道をしらず

「四十」になる頃から、「老い」がはじまる。そして「若さ」に戻ることはできない —— こんなふうを受け取ったのしゃ。

えんつこ まんまん さあけたあ

(3) 闇夜のカラス

むかし。えらい絵描きたちが、宿屋さ泊まっていたんだと。

そして、「おれは山水だ」、「おれは武者絵だ」、「おれは美人画だ」って、ほれ、みんな自分の得意な絵のことを語っていたんだと。

ところが、そこに一人、なにも描きようを知らねえ人が泊まったんだと。

宿屋では、えらい立派な絵描きさんたちが泊まったからって、まず、屏風だの、襖だの、掛け軸だの、あてがって、絵を描いてもらうことにしたんだと。

つぎつぎと絵が出来ていく中で、その絵を描けない人、いっしょけんめに墨刷っているんだと。

そして、あてがわれた屏風さ、その墨をありったけ塗って、ぽんと筆を置いたんだと。

「おめえ、なに描いたんだや。こんな立派な屏風を真っ黒に塗って … 」

みんなが不思議顔すると、本人は言ったんだとしゃ。

「おら、闇夜にカラスを描いたんですが」

「カラスなんぞいねえべや。どこさ、カラスいるのや」

そう聞かれて、すまして答えたとしゃ。

「闇夜にカラスが見えるつつのか。見えねえべさ」

はい えんつこ まんまん さあけたあ

(4) ミミズクの耳か、タカ目か

むかし。ミミズクとタカが、たがいの自慢話をしたんだと。

まず、ミミズクが言ったと。

「やあ、やあ。^{ゆんべ}昨夜な、たいした音がしたが聞いたか。とんでもねえものが落ちたような音だった。いったい何の音だったべか」

これを聞いたタカは、

「どれやあ、ほんでえ、おれが行って確かめてくるわい」

って、出はっていったと。

それから、しばらくして帰ってきて、言ったんだと。

「なんにも落ちてねえぞ。落ちていたのは、ヨウガ(夜の蛾)の脚が一本だけだ」

ヨウガの脚一本落ちる音を聞いたミミズクの耳がええもんだか、その脚一本を見つけたタカ目がええもんだか、勝負はいまもついてねえのしゃ。

えんつこ まんまん さけた

第六話 嫁ごたち

(1) なんでも〈お〉をつけろよ

むかし、ある山陰(山奥)に娘がいたんだと。

その娘が、里の百姓の家に嫁に行くことになったんだと。なにしろ、山陰から里さ嫁に行くのだから、お母つあんは心配してやあ、

「向こうの家さ行ったら、なんでもまでえに(丁寧に)語れよ。それからな、言葉のはじめに〈お〉をつけるのも忘れるな」

って、言ってきかせたんだと。

無事にご祝儀もすんで、ある日のこと、嫁は、庭にムシロを広げて、麦を干していたんだと。そしたら、西の空から、カラスがたくさん飛んできて、干している麦を、ポックリポックリと、食いはじまった。

嫁は、たんまげで叫んだと。

「お西の、お空から、おカラスが、お飛んできて、お麦、おポックリ、おポックリ」

姑母つあん、たまげてやあ、

「そんなに〈お〉つけるもんでねえよ。〈お〉は、つけんなよ」

って言ってきかせたと。

その晩、夕飯のとき、きゆうに嫁ごあ、笑い出したんだと。

にたにた、くっくつと笑っているんだと。

それというのも、舅父つあんの顎さ、ご飯粒がくつついて、それが口といっしょに、あっちへ行ったりこっちへ来たりして、おかしかったんだと。

「なに、おかしいのや」

って聞かれて、嫁ごは言ったんだと。

「やじの、とげえさ、はんつぶついて、がしい、がしい」

つまり、こういうことなのしゃ。

「親父の、顎さ、ご飯粒ついて、おがしい、おがしい」

こんどは、みんな〈お〉をとってしまったから、こんなことになったのしゃ。

「こんでは、とてもだめだ」

ってことになって、とうとう嫁は山陰の家さ帰されたんだとしゃ。

ほだから、やたらに〈お〉をつけてもおかしいし、つけないのもおかしいんだぞ。

(2) 屁^へつたれ嫁ご

むかし。あるところで、お嫁さんをもらったんだと。

そうしたら、しばらくするうちに、お嫁さん、顔色悪くなったもんだから、お姑さまが心配してからに、言ったんだと。

「これこれ。おめえさま。この頃なんだか顔色青いようだが、どこか痛えどこねえのすか」

「なあんにも、別にどこも痛くござりえん」

嫁さんがそう言うから、そのままにしていだっけが、お嫁さん、ますます顔色わるくなっていくんだと。

「氣い遣ってねえで、語ってみせえ」

そうしたっけ、お嫁さん言うんだと。

「わたし、ほんとうは屁^{こた}え出てえの堪えていたために、顔色わるいのかしやねえ」

「なに語るけやあ。そんなこと我慢してたのか、まず。屁^{こた}え出てえのなら、たれていいから」

お姑さんが、あきれてそう言ったれば、

「ほんで、屁^{がっ}えたれるから、お母^{ろぶち}つあん。囲炉裏の炉縁^{ろぶち}さ、すがっててけらいんや」

って頼むんだと。

「なあに、炉縁^{ろぶち}さすがってねえだって、大丈夫だから、たれせ、たれせ」

「いいから、すがっててけらいんや」

あんまりお嫁さんが頼むから、そんで、お母^{がっ}つあん、炉縁^{ろぶち}さすがったれば、

「ほんで、たれっからねす」

って、お嫁さん、お雷^{れい}さまみてえな音で、どでかい屁^{がっ}えたれたっけ、お母^{はり}つあん、梁^{けた}の桁^{けた}まで吹っ飛ばされて、桁^{けた}に引っかかって、降りてこねえんだと。

「嫁や。屁^{がっ}の口とめろ。屁^{さか}の口とめろ」

お母^{がっ}つあん、上^{さか}から叫んだんだと。

「まず、まず、まず、まず。いかなることだべ。屁^{おっ}えたれっからって、まさかこんな大きな屁^{おっ}えたれっとは思わなかった。だれか、息子、呼ばってこや」

息子、呼ばってきて、お嫁さんの屁^{おっ}の口さ、挽き臼の輪っ玉(挽臼の引き手)を突っ込んでやって、やっとなったんだと。

「いい嫁ごだけども、こんな屁^{おっ}えたれられては、ここさ置かれねえ」

って、お嫁さんを実家さ帰すことになったんだと。

息子に連れられて、しばらく行ったら、まず、梨の木^{おっ}の大きな大きなのがあつてからに、とつてもうまそうにいっぺえ実^{おっ}っていたっけ。

その木の下で、木綿売りがいて、その梨、採^{おっ}んべとして、石投げたり、水ぶっかけたりして、もいで食^{おっ}うべとしていたんだと。それ見て、お嫁さん、言ったんだとしゃ。

「なあに、こつたな梨、おら、屁^{おっ}で、もぐことできる」

したっけ、木綿売りは、怒^{おっ}ってや、言ったんだと。

「なにしたっけ、この女、^{おなご}屁で、もぐってな。おめえ、ほんとに屁で、もぐこったら、この反物^{たんもの}みなやる」

「ほだら、^よ良かますか。もいでみせっから」

って、お嫁さん、梨の木にその尻^{けつ}むけてからに、いきなりたれたれば、屁の口さ突っ込んであった挽白の輪っ玉、梨の木さいきなり当たったから、梨の木、揺れに揺れて、あるぐれえの梨、みなもげたんだと。

「ほらほら、どうだね。おら、屁で、もいだべや。約束だから反物みなよこさえんや」

木綿売りは約束だからって、反物さっぱとよこしたんだと。

それ見た息子は、屁で反物ば稼ぐこったら、こんないいことはねえと思って、

「さあ、さあ。実家^いさなど帰らねえで、おら家さ、あべ、あべ」

って、その反物を^{しよ}背負って、二人でまた戻ってきたんだと。

そんで えんつこまんま さけたと

(3) 屁たれて死んだ嫁さん

ほんとのことでね、この話、ほれ。

そこの角っこの家の話なんだよ。

めでたいご祝儀話がまとまって、お嫁さんを迎えたのしゃ。

いよいよ、三三九度の盃になって、お嫁さんとお婿さんが固めのお神酒^{みき}を飲んでいたとき、花嫁さんね、緊張していたんでねえべか、屁えむぐしてしまったんだと。うんと大きい屁、ブツとたってしまったんだと。みんな、たまげたべっちゃや。ほんでも、何事もなくご祝儀は終わったのしゃ。

ところが、ほれ、そこの家のお嫁さんになってからしゃ、お姑母^{しゅうとがが}さんが、なにかにつけて、いっつも嫌み言うんだと。

「おめえ、あんな大事なときに屁えたってやあ。おしよしいこたあ(はずかしいこと)」

そのたんびに、お嫁さん、顔を赤くして俯^{うつむ}いていたっけが、そのうち、さっぱりいなくなったんだと。

「どこさ行ったんだべ」

みんなして、探してみたっけ、そのお嫁さん、井戸さ入って死んでいたんだと。

なにも屁ひとつで死ななくてもねえ。

いまはそう思うかもしんねえが、昔はね、屁ひとつで、つるべ井戸さ入って死んだんだよ。お嫁さんになったばかりで、つるべ井戸さ身を投げたのしゃ、かわいそうに。

いたましい話だが、ついこの間、ここにあったほんとのことなんだよ。

第七話

おら方の桃太郎

おらほ方の(おれたちの地域の)桃太郎の話すっからね。

むかし、むかし、このあたりに桃太郎という人があったんだって。

たいへん力が強くて、なにをやっても人に負けねえごうけつ豪傑だったんだと。

それで、おじいさんとおばあさんにたのんで、鉄の棒をつくってもらって、

「鬼ヶ島に、鬼が住んでっから、おれ、鬼退治に行ってみてえ」

ということになって、いよいよ鬼ヶ島さ出かけたんだと。

しばらく行くと、おっ大きな岩を、自分の指で、ぐりぐりと掘っている人があったんだと。

「なんとまず、あんた、指で岩を掘って、なじよにする気すか」

桃太郎が聞いたれば、その人、

「おれは、ここらでも名の知れたいわごうたろう岩豪太郎とって、手で大岩を掘ってしまう者だ」

つうんだと。

「やあや。これはたいした豪傑だなあ。おれ、いまから鬼ヶ島さ鬼退治に行くんだが、ひとつ、いっしょに

ついて来やへんか」

桃太郎がそう言ったれば、その岩豪太郎、

「そんでえ、行ってみっか」

ということになって、ついて来たんだと。

そうして、連れだって行ったれば、こんだあ、にけん二間(約4メートル)しほう四方の大きなお堂さ、

綱をかけてからに、しょ背負うべとしてる人がいたんだと。

「なんと、まず。そのお堂をしょ背負う気すか」

って聞くと、その人、こう言うんだと。

「なに、おれはここら一番の力持ちだから、こんなお堂はひとしょ背負いにしょ背負ってみせる」

「まず、たいした力持ちだ。ほんでえ、おれたち、いまから鬼ヶ島さ鬼退治に行くから、あんたもひとつ一

緒に行ってみやへんか」

「うん、そだら、よ良がんです」

って、その人も一緒に行くことになったんだと。その人の名前は、おどうじょいたろう堂背負太郎つうん

だど。

それから、三人連れだって、鬼ヶ島さ行ったんだってしや。

そうしたれば、鬼たちはみんな、鑄物採りさ行っていて、留守だったんだと。

ほんで、桃太郎は大戸の口に立っていっぺし、岩豪太郎はかみ上の口を守れ、お堂背負太郎は裏の

戸を守れって、三人して待っていたんだと。

そこさ、鬼たち鑄物持って、がやがや帰ってきたんだと。

「なんだ。おらい家の戸っこ、さっぱり開かねえぞ」

って、騒ぎ出して、さあ、そこで鬼と合戦になったんだとしや。

桃太郎は鉄の棒で叩きつける、岩豪太郎は指で鬼の目玉をくり抜く、お堂背負太郎は、お堂を背負

ってる縄で、鬼を縛り上げる、すっかり鬼退治して、三人は家さ帰ってきたんだって。

第八話 白馬で竜宮へ行った和尚さんと小僧さん

むかし、むかし、ずっとむかし。

ある寺の和尚さんは、三月のお節句になると、白馬に乗って竜宮城さ行くんだと。

毎年、それを見ていた小僧さんは、

〈竜宮城さ、おれも行ってみてえなあ。どんなところかなあ。行ってみてえなあ〉

そう思っていたんだと。

んでも、和尚さんは、

「だめだ。だめだ。まだ、早い。そのうちに連れていくから」

ってばり言って、さっぱりお供することができねかったんだと。

そんで、ある年の三月、お節句がちかづくと、

〈今年こそ、和尚さんに気づかれぬようについて行きたい〉

と思っていたんだと。

和尚さんは、立派な衣に着替えて、

「小僧。小僧。竜宮へ行くから馬の仕度しろよ」

って言うから、小僧は馬の仕度をしたんだと。

〈今年こそは行ってみたいものだ〉

小僧はそう思っていたから、和尚さんを馬に乗せて、

「さあ、行くぞ」

って、和尚さんが声かけたとき、馬の尻尾^{しりっぽ}さ、しっかりと捉まってからに、そのまま、竜宮城まで行ったんだとしゃ。

そうしたら、そこには立派なお寺があつて、和尚さまは会議さ出るために、馬をつないでそのお寺の中さ入っていったんだと。小僧は、ぱっと馬から降りて、縁の下さ隠れていたんだと。

隠れていたら、なんか庭に紙切れが落ちていたから、縁の下から出て、拾ってみたっけがな、

《 いまのお寺は、いつの日に大火が出て、和尚さまは焼け死ぬ 》

そんなことが書いてあつたんだと。

小僧は、それを隠し持って、また、和尚さんが会議おわつて、馬を曳きだして帰る時に、白馬の尻尾につかまって帰ってきたんだと。

そして、知らん顔してるうちに、いよいよ《 いつの日 》という日になったんだと。

「和尚さん。和尚さん。和尚さんは今日、焼け死ぬものね」

って言ったんだと。

和尚さんはたまげて、言ったと。

「なんだ、この小僧。なんでことを言うんだ。それにしても、なんで、おめえ、そんなことが解るっけやあ」

「これこれ、和尚さま、知らなかんべ。おれ、じつは竜宮城まで、和尚さんどこ追っかけていったけもな。

そして、竜宮城の庭で、こういう紙を拾ったんだ。見らえんや、和尚さん」

小僧は拾った紙を見せたんだと。

和尚さま、たまげてしまつてからに、すぐに津谷の川さ走っていったんだと。

そうして、菰^{こも}を川の水で濡らして、それをかぶつたんだと。こうしていれば、火から逃げられると思つたんだべね。

そのうちに、大風が吹いて、お寺はととも大火事になつて、めろめろ、めろめろ、燃え出してしまったんだと。

和尚さまは津谷川さ行つて、菰をかぶつて、それを濡らし濡らししていったと。

そうして、川原に座つて、お寺が焼けるのを、「あれよ、あれよ」って見ていたんだと。

そしたっけ、風が強くて、お寺の火の粉がぼんぼんと飛んできて、和尚さまの菰さ、くついで、そして、和尚さまは、とうとう焼け死んだんだってや。

当たる罰は、菰かぶつても当たる——これは、そういうどこから出た言葉なんだって。

焼けた寺には、和尚さまが、大事に隠していた七つの宝があつたんだって。

七つあつたというけつども、わたしは四つだけ知っているんだね。

一つは「縫い目なしの衣」、二つ目は「紙のない障子」三つ目は「塩見^{しおみ}の杓子」。この杓子は、おつゆをかき回すと、いつもええ塩味のおつゆになる宝物なんだと。四つ目は「得一^{とく}一升の小豆」というの。これはね、小袋^{こんぶくろ}さ、いつも一升の小豆が入つていて、食べても食べても、宝物だから、一升ずつ、いつもあるんだと。

みんな、その火事で焼けてしまったんだって。

あとの三つは、惜しいかな、わたしも知らないのね。

えんつこ まんまん さけたと

(第一話から第八話まで 記録 小野和子)